

# 高山

たかやま  
高山の原生林を守る会

会報 第 106 号  
2018年 9月



第 159 回自然観察会:吾妻・不動沢橋－慶応山荘手前 夏の山岳植物観察会

7月8日(日)に吾妻・不動沢橋－慶応山荘手前 夏の山岳植物観察会を実施しました。参加者は8名でした。前回に続いて福島大学の増田さんが参加されました。梅雨のさなか、九州・中国・四国地方の未曾有の大水害発生の翌日でもあり、最悪中止も覚悟していました。しかし、不思議なことに当日は日差しも時々望め、思いのほか穏やかな天候の中での観察会となりました。不動沢橋登山口から歩き始めると増田さんが次々と見つけた昆虫を紹介してくれ、さながら昆虫観察会となりました。昆虫好きの青柳さんは増田さんの説明を真剣な表情でメモっていました。増田さんが参加されたおかげで、今回は沢山の昆虫が観察できたように思います。梅雨時期と昆虫の繁殖時期は重なるのでしょうか。ハクサンシャクナゲの花中での美しいミドリに輝くアオカミキリの繁殖活動や大往生したアズマヒキガエルの遺体を徘徊するツノグロモンシデムシ、孵化後間もないクモの幼虫の集団など、ダイナミックな昆虫の生態の一端を観察することができました。また、オオバツツジの花との予期せぬ遭遇に加え、ウメガサソウ、マルバノイチヤクソウなど他の吾妻山域の観察会では馴染みのない植物の花も楽しむことができました。井戸溝で昼食後、今回の観察会の中心テーマであった満開のヤエハクサンシャクナゲを堪能して帰路につきました。



ヤエハクサンシャクナゲ



オオバツツジ



自然林の清涼な空気を満喫しました

ランの様に下を向いて釣鐘の形で数輪まとまっている。「ん〜」と思わず唸ってしまった。「ツツジでこんな種類があるんだ。」と驚いた。未だ、つぼみも付いていて本当に見頃で、可愛いし、美しい。中々出会えないらしく「今日は、大変幸運」との事。

登山道脇には、ヤマブキショウマ、ミヤマホツツジ、ナンブアザミ、ウラジロヨウラク、モミジカラマツ、コメツツジ等の花が咲き。ハクサンシャクナゲの株も立派で、標高を上げる度に、ドンドン花が綺麗になり、つぼみを持った木は、ピンク色が濃くソフトクリームのような形で素晴らしい。中々シャクナゲの花の季節には、出会えてないので、これも幸運。

その上にお昼を食べた後に、ヤエハクサンシャクナゲを見つけに、皆で更に登って行くと、1株を発見。確かに、花弁が八重になって、咲いていました。更に驚いたのは、日当たりのよい株の花には、物凄い数と種類の昆虫が、蜜を求めて集まって来ていました。毎回、新鮮な感動を森の営みから貰って、リフレッシュして大満足です。自然は、凄いパワーがありますね。その中に、行けることに感謝です。

観察会とは、離れますが。毎朝の散歩コースの胡桃川にカモの親子を発見。とても可愛い。今日も、会えるかな。涼しそうに川の流れに乗って泳いでいます。



ブナハマルタマフシ



ネバリノギランの花冠は半透明



キタゴヨウマツとコメツガの抱擁



ウラジロヨウラク



ゼラチンの様なゴゼンタチバナの花弁



シャクナゲに集う昆虫達



キタゴヨウマツとコメツガの混成林

## 不動沢橋—慶応山荘コースで観察された昆虫

159回観察会で遭遇した昆虫の生態について調べてみた。いずれも一般的な昆虫で、垂直的な生息範囲が広いことは意外であった。近年は、居住圏の自然林伐採により出会う機会が少なくなってしまったのかもしれない。



キンモンガ

日本特産種。幼虫はリョウブの葉を食べる。黒地に薄黄色の紋が目立つ。紋が白っぽい個体もある。春と夏の2回出現し、平地にも山地にもいる。昼飛性。



イカリモンガ

昼飛性。翅前翅にある大きなオレンジ色の碇形状の紋が、和名の由来。幼虫はシダ植物のイノデ属の植物などを食草とする。



ジョウカイボシ

甲虫。花や葉上で待ち伏せし小昆虫を捕獲する肉食性。4月ごろ幼虫はコケや石の下で蛹になる。名前は平清盛の法名の浄海坊に由来する。分泌液は有毒。



ルリハナカミキリ

ミズナラに寄生する。ミドリカミキリやアオカミキリ、アオムシダマシに似ている。体色が雌はオレンジ、雄は淡青色であった。アオムシダマシの触角と脚はうすい黄褐色。



カメノコtentou

甲虫の1種。日本産tentouムシ科の最大種。幼虫はクルマシロシなどの幼虫を食べ、成虫で樹皮下や岩の間で越冬。沢沿いに多く生息する。赤い警戒液を分泌する。卵は楕円形で美しいオレンジ色。



ドロハマキチョツクリ

甲虫チョツクリゾウムシの仲間では体色が美しい。中部以西のものは、上翅に金赤色斑があり、中部以東のものは赤い紋がなく、緑色型と呼ばれる。イタドリ、ヤマブドウ、サルナシ、マンサク、コナラ、カエデ、ヤナギなどの葉を巻く。



ヨツボシモンシデムシ

ネズミやカエルや小鳥などの動物の死体に集まり、それを餌とする甲虫。名前の由来は、死体があると出てくるため、「死出虫」と名づけられたことによる。森の葬儀屋。死体を地中に埋めて肉団子に加工し、これを口移して幼虫に与える習性を持ち、親が子の世話をする「亜社会性昆虫」として知られる。ダニが着いているので接触注意。



ヤマトシリアゲムシ

肉食性で、死んだ昆虫の体液を吸う。生きた昆虫を捕食することはない。雄は求愛行動で雌に昆虫の死骸を与え、雌がそれを食べている間に交尾を達成する。昆虫としては珍しい給餌行動をとる。雄の腹端がサソリのように上方に反りかえった姿が名の由来。先端は交尾器で攻撃性は無い。



ニワハンミョウ

肉食性の甲虫。平地から山地まで生息地は広い。近づくとも飛び上がり振り返って誘うようなしぐさから、ハンミョウは「ミチオシエ」の通称がある。全身が茶色のニワハンミョウは土が黒い火山性草原などに多いとされるが、西吾妻ボランティアでも遭遇しており、確かにそのような場所を好むのかも知れない。

## 花塚山・虎捕山・野手上山の放射線量調査報告

花塚山、虎捕山、野手上山の放射線量は最初の測定値のそれぞれ 30.0%、34.1%、32.2%まで減少しました。これは放射性セシウムが拡散しないと仮定した理論値より 5.1%、7.8%、11.6%多い減少でした。



測定地点の平均値の比較



野手上山(2018年/2012年)



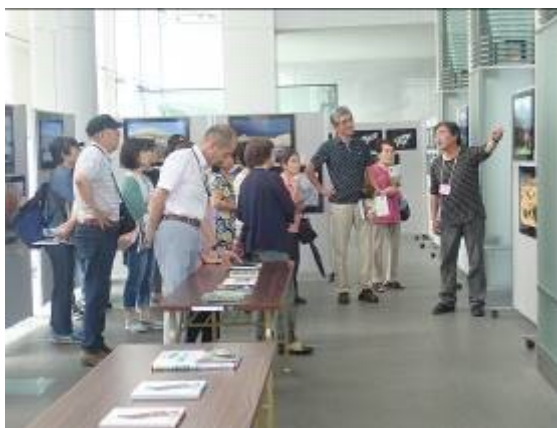
虎捕山(2018年/2012年)



花塚山(2018年/2012年)

## 瀬川強イーハトーヴ西和賀写真展&高山の原生林を守る会福島の自然・花・山写真展の報告

2018年7月9日(月)~15日(日)に福島駅西口コラッセふくしま1階アトリウムと5階プレゼンテーションルームで開催されました。709名の来観者があり、盛況のうちに終了することができました。来観者は「西和賀の四季」と「西和賀の心象世界」に感動されていました。カンパを寄せていただいた方々、また受付等運営にご協力いただいた



瀬川さんの説明に聞き入る来観者

方々に改めて御礼を申し上げます。瀬川さんからは「今後も精進して良い被写体を探していきたいと思います。またお会いできることを楽しみにしています」とのメールが届いております。これからも西和賀に押しかけて瀬川夫妻の賑やかな会話と日本の原風景に浸りましょう。

カンパの支出内訳は以下の通りです。

### 写真展会計報告

収入			支出		
科目	金額	内訳	科目	金額	内訳
カンパ	112,000	34名	謝礼	30,000	
			交通費	40,000	往復2回
			宿泊費	12,400	2名分
			駐車料金	1,400	
			懇親会経費	7,000	2名分
			昼食代	8,410	3日分
			諸経費	12,790	チラシ、パンフレット、シール他
合計	112,000		合計	112,000	

亙理地壘山地の七峰（ななうね）を初めて歩いたのは2009年12月6日のことであった。七峰（ななうね）というのは南から①鹿狼山（かろうさん）・②五社壇（ごしゃだん）・③地藏森（じぞうもり）・④権現森（ごんげんもり：2回目に歩いたときは権現堂山という標示になっていた）・⑤主義山（しゅぎやま）・⑥音羽森（おとわもり）・⑦金華山（きんかざん）の7つの山々をいうのである。

さて、「地壘」というのを調べると、並行する断層によって限られ、周囲よりも相対的に隆起した地塊、とある。亙理地壘山地は福島県新地町鹿狼山から宮城県山元町・亙理町を経て、阿武隈川まで海岸沿いに一直線に続いている。標高300m前後の山々が連なっておおよそ30km程もある。

これらの山々は低山でもあり、鬱蒼とした杉林もあるので、縦走するなら落葉後の12月辺りが良い。そうすると木々の間から、東側には太平洋、西側には蔵王をちらちらと眺めながら気持ち良く歩くことができる。また、実際にはこの7つの山を一度に全部歩くのはアップダウンもあり時間がかかる。鹿狼山駐車場（あるいは大沢峠）・鈴宇峠・福田峠・小斎峠の4つの峠のどこか2カ所に車を置いて2回に分けて歩くのが良いと思う。

私が実際に歩いたのは、2回とも鈴宇峠から小斎峠の間で、鹿狼山は省いてある。それでもかれこれ6時間ほどかかった。1回目の2009年は、山頂ごとの標示板もちっぽけで、黄色の小さな手作りプレートだったが、2回目に歩いた2013年12月15日には、とても立派な標示板になっていたので驚いた。ここ数年で歩く人がずいぶん増えた様であった。そういえば、鹿狼山駐車場にも、七峰（ななうね）コースの案内が出ていた。

これらの山々は、昔は薪を取る落葉広葉樹の山で、里山として手入れされていたのであろうと思われる。どの山の山頂にも祠があって、昔の人々が豊作や家内安全を祈ったであろう痕跡がたくさんあった。また、主義山と音羽森の間には花嫁峠という峠があって、昔はここを歩いて人が交流していたことがうかがわれた。今は、手入れされない杉の植林地が多くあり、花粉症の私としては何とかしてもらいたいのが当面は無理だろう。

ところで、私の家は新地町鹿狼山近くにある。居間の窓からは鹿狼山頂上の杉木立までよく見える。台所の小窓からは右隣の五社壇と地藏森が見える。この3つの山は福島県新地町と宮城県丸森町の県境尾根にもなっている。けれども、地藏森以北に続く山々は宮城県になり、自分の生活圏から離れるため、山の名前を知る機会も無かった。七峰（ななうね）を縦走してからは、地藏森から続く北の尾根も気になっている。写真は我家の前から見る田んぼと亙理地壘山地・七峰である。間もなく収穫を迎えるこの風景は安らぎがあり美しいと思う。

この亙理地壘山地を鹿狼山から阿武隈川まで、つまり、端から端まで歩きたいと思って、ここ数年、山仲間を呼び寄せては歩いている。午前中歩いて、お昼は荒浜ではらこ飯を食べるような計画だからなかなか進まない。今年は割山峠から槻木橋まで歩きたいと思っている。それで最後だ。東日本大震災の工事やその他の工事で大部削り取られているようだから、途中で工事現場を渡っていく場所もあるらしい。どうなることやら。

（2018/09/09 記）



田んぼの向こうに亙理地壘山地・七峰（ななうね）

# 東北ブナ紀行（67）

奥田 博

今回紹介する村山・葉山は第82回の村山・葉山の中で「十部一峠から登るのが、最も短い距離でブナの純度も高い。このコースは次号で項を改めて紹介したい」と述べた後、東日本大震災が起きて「大震災が教えてくれたもの」シリーズに入って、そのまま書かなかったコース。樽石山も葉山の東外れの山。結局、葉山は今回を含めて、4コース全てを紹介したことになる。

## 99) 葉山 1462m

寒河江市と肘折温泉を結ぶ国道485号線の十部一峠は、標高880mで豪雪のため半年しか車は走れない。峠の山神様に挨拶して、長い林道を走ると登山口に到着する。

登山口は既にブナ林の中だが、沢を越えて急坂を登り斜面が落ち着くと、ブナ林が広がる。穏やかな斜面は根を据えるには急斜面よりは安定するだろう。大木が多くなったように思えた。下界は暑い日々が続くが、この森は暑さ知らずだ。東西に広がる尾根に出ると、急にブナは矮小化して森も形を失った。尾根は展望があり月山や鳥海山、朝日連峰などが近い。池塘を越えて葉山神社は至近の距離だった。

コースタイム：登山口（1時間）東西の尾根（30分）山頂（1時間10分）登山口



## 100) 樽石山 1155m

葉山はCの文字状に尾根が繋がるが、山頂はCの中心。山頂からみると東の末端に位置する樽石山だが、地図上に名前はなく、実際に登った1155mピークにも樽石山の表示はなかった。名前は山麓の樽石集落から名付けたと思われる。いずれにしても、山頂のハッキリとした表示が無い山は珍しい。

樽石集落から樽石川に沿って舗装された道を観察センターと呼ばれる小屋まで入る。ここに車を停めて歩き出す。山道に入って暗い杉林から自然林に入るが、その先で送電線の巡視路となり、小沢に沿った急な道をたどる。尾根にのると、北斜面に粒の揃ったブナ二次林が広がる。途中、社務所跡の看板を見て「シャムコース」はこの社務所跡から名付けた？と疑問が解けた。北の尾根を巻くように登ると、主尾根を辿るようになる。そこは見事なブナが林立しており、ブナにカメラを向ける時間が増え、自ずと登るスピードは落ちる。願掛岩からは蔵王連峰などの展望が得られた。樽石山とおぼしき山頂を越え、「千万ドルのドウダン」では沢山のドウダン花筒が落ちていた。尾根を下ったところに大ブナがあり、そこで撮影と大休止して戻ることにした。

コースタイム：登山口（1時間45分）社務所跡（40分）山頂（10分）大ブナ（2時間20分）登山口



十部一峠（左）と樽石山（右）のブナ。ブナは下から見上げることが圧倒的に多いが、表情は千本差万別

## ナンゴクミネカエデ (*Acer australe* ムクロジ科カエデ属)

安達太良連峰の山稜上部の樹林帯に植生する落葉広葉樹。雌雄異株。吾妻連峰にはウリハダカエデの仲間に属するウリハダカエデ、ウリカエデ、ミネカエデ、コミネカエデは植生するが、ナンゴクミネカエデは今のところ確認されていない。ナンゴクミネカエデはオガラバナ、ミネカエデに次いで標高の高い山域に分布するカエデであるが、名前の通り当初は奈良県大峰山以南の分布で、東北には自生しないとされてきた。しかし、今では岩手県以南で同種の特徴を備えたカエデが確認されている。吾妻連峰でも自生地があるのかもしれない。

葉は対生し、葉脈は5つに別れ、掌状に5つの裂片を形成する。中央の裂片は大型である。葉形はコミネカエデに似るが、各裂片の先端は尖り、特に中央裂片の先端は尾状に長く伸びる。裏面脈上には赤褐色の縮毛が残る。葉柄は鮮紅色である。ミネカエデの葉柄は黄緑色～淡紅色である。葉の形態でミネカエデとの区別は可能であるが、コミネカエデとは識別が難しいかも知れない。

花は頂性で、短枝の先に着生する。総状花序を形成し、5～10個の小花を着生する。花弁とガク片は5個、いずれも黄緑色のへら型で、形状が似ていることから花弁が10枚付いているように見える。ガク片は外側に着き、花弁の方が細身で基部も細い。上から見ると花弁とガク片が交互に並ぶ。雄しべは8個ある。花糸は赤く、葯は黄緑色である。雄花の中央には退化した雌しべの痕跡が残る。雌花は2分岐した赤い柱頭を先端に付けた鮮赤色の子房の翼が美しく、目を引く。雌しべの基部にはシナ化した緑色の葯をつけた雄しべが付いている。コミネカエデは花序を下垂し、ミネカエデ、ナンゴクミネカエデは花序を直上して咲かせる。また、ナンゴクミネカエデは花軸、花柄が鮮赤色であることで3種は区別できる。種小名 *australe* は「南の」の意味であるが、今では、分布の実態を反映していないかも知れない。

今から20年以上前になるが、カエデの花を集中的に探索した時期があった。吾妻連峰のカエデ類の踏査を終えた頃に、安達太良連峰を散策した。花心部が美しいミネカエデの花に目が留まり、撮影した。後に調べたところ限りなく本種に近いことが分かった。その後、安達太良山系ではコロニー状に群落が形成されていることに気づいた。



## ミヤマタムラソウ (*Salvia lutescens* var. *crenata* シソ科アキギリ属)

吾妻連峰のブナ林の湿地帯に植生する多年草。山野に自生する仲間にはナツノタムラソウ、アキノタムラソウがあるが、今のところ吾妻・安達太良連峰で確認されたのは本種のみである。ミヤマタムラソウはコナラやミズナラ林に植生する草本とされているが、本種の植生地はそれからすると明らかに標高が高く、隔離分布している。花冠の外面に軟毛が目立つことからケナツノタムラソウ(毛夏の田村草)の別名がある。ナツノタムラソウとミヤマタムラソウは単系統ではなく中間型も存在するらしい。

葉は対生。1～3回羽状複葉。小葉は卵形～楕円状卵形～披針形。頂小葉が広卵形～円形、鈍頭～円頭。葉表には短軟毛が散生し、葉裏には腺点がある。葉柄の基部に長軟毛が開出する。茎の切り口は四角形である。これはシソ科の特徴である。茎には柔らかい白毛が密生する。

花は腋生。花茎を伸ばし穂状花序を形成し、数節に亘って唇形花冠と呼ばれる左右対称の合弁花を輪生する。横向きに花を咲かせる。萼も花冠も上下2唇に分かれる。萼は下部が鞘状に伸び、先は浅く2裂する。花穂軸や萼に白軟毛が密生し、腺毛が混じることが多い。花冠は明るい紫色である。白色系の花として解説されていることが多いが観察された株はヤマハッカのように明瞭な紫色であった。これは自生地の標高が関係しているのかもしれない。長い雄しべが2個あり、花冠の外へ突き出ている。葯の色は赤紫。雌しべは柱頭まで白く、雄しべの間の上唇側に突き出る。柱頭は、未熟時は尖っているが成熟すると2裂する。近年、ナツノタムラソウは雄しべが花粉を持たない株が混在する雌性両性異株であることが明らかにされた。

今から数年前の観察会の折、湿原の片隅の灌木の下にヤマハッカに似た花をつけた草本に遭遇した。ヤマハッカは湿地には植生しないし、季節的にヤマハッカの開花期でもない。タムラソウに似ていると思ったが、標高的にタムラソウが植生しているとは思えなかった。入山者の多い山域では思わぬ植物に出会うものである。



## 第160回自然観察会案内:奥土湯黒沢・ブナ林の紅葉観察と芋煮会

日時:2018年10月14日(日)7:30~16:30 開催日が早まりました

集合場所 四季の里正面入り口駐車場(あづま公園橋側) 7:30 参加定員 20名

内容 台ヶ森山麓の山道を辿り、ブナ林の紅葉を観察します。黒沢の沢辺で芋煮会を開きます。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋(軍手複数)、着替え、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳、食器

\*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。参加費用:保険代(500円)

申し込み:10月13日(土)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時~9時でお願いします)。

## 西吾妻登山道誘導ロープ取り外しボランティア(NF米沢と共同)実施日が変更になりました

1. 実施日:10月20日(土)6:00~17:30(雨天時10月21日に順延)

2. 定員 8名(山岳での行動において自己管理のできる方)

3. 内容 デコ平湿原駐車場から湿原を経由して西大巔に登り、西大巔山頂から西吾妻小屋までのロープ取り外し作業と杭の補修作業を行います。

4. 集合場所・時間:四季の里正面入り口駐車場 6:00(参加費:0円)

5. 申し込み:10月19日(金)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメール(全員返信モード)にてお願いします。(電話申込は午後7時~9時でお願いします)

## 第161回自然観察会案内:十万劫・里山の陽だまり観察会と総会

日時:2018年11月23日(金)7:30~16:30 (総会 13:00~16:00 渡利学習センター)

集合場所 小鳥の森第一駐車場 7:30 参加定員 20名(総会は会員の参加制限なし)

内容 阿武隈山系の林相が随所に残る十万劫の自然林を散策します。午後は総会です。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋(軍手複数)、着替え、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

\*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。参加費用:保険代(500円)

申し込み:11月22日(土)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時~9時でお願いします)。

## 花塚山山頂部の森林伐採

5月25日の花塚山の放射線量調査の際に、頂上直下で伐採作業をしている現場に遭遇した。付近には「富士見台」の案内板と「保安林内作業許可済標識」が設置されていた。標識には、「行為の目的:歩道開設・維持管理」「行為面積:0.0209ha」と記載されていた。作業している方の話では、花塚山頂から富士山が撮影されたことを契機とした事業とのことであった。写真で分かるように伐採地は山頂直下の急傾斜地であり、斜面上に登山道を切れば豪雨に伴う表土流亡のリスクが増すことは明らかである。花塚山の落葉広葉樹林の美しい緑の回廊を楽しむハイカーは多い。水源涵養保安林を伐採して作られた眺望にいかほどの付加価値があるのだろうか。しかも富士山が見える時期は限られるのである。県内には眺望確保のため山頂周辺を伐採したり、構造物や知事の登頂記念石碑を建てたりした山が散見される。これらは、古来より山頂に鎮座する祠とは別の動機によるものであり、その行為は樹木を障害物としてしか見ない「樹も森も見ない」前近代的な行政姿勢を感じさせる。郷土の森を伐採し、美しい福島復興と誇れるのだろうか。



この伐採整備は必要でしょうか

訂正のお願い:会報105号1、5頁の「カワヂシャ」は指定外来植物「オオカワヂシャ」の誤りでした。

振込による会費の納入は、郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第106号 2018年9月発行

編集・発行:高山の原生林を守る会 HP:<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先:佐藤守 Phone 024-593-0188(夜間7時~9時)

郵便振替:02170-0-24351「高山の原生林を守る会」

入会方法:年会費(1000円)を添えて上記まで

編集:佐藤・奥田・小幡